

オンライン海外体験学習の可能性

—「国際協力フィールドワーク(インド)」の実践から—

加藤 俊伸

国際協力機構 (JICA)

Potential of Online Overseas Experience Learning:
A Case Study of a Development Studies Fieldwork Program in India

KATO Toshinobu

Japan International Cooperation Agency (JICA)

キーワード：海外体験学習、オンライン体験、開発教育、サービスラーニング

1. はじめに

Covid-19の世界的な流行により、2020年度の大学の海外体験学習のほとんどが中止となった。筆者が教員として勤務していた桜美林大学リベラルアーツ学群国際協力専攻においても、2020年度は8月に現地学習を行う「国際協力フィールドワーク(フィリピン)」科目は4月の段階で延期(その後中止¹⁾)となり、例年2月に現地学習を行う「国際協力フィールドワーク(インド)」も8月の段階で実際の訪問が難しいことが確定した。そのため、受入団体であるインドNGOとオンラインによるプログラム実施について相談し、大学に対して「授業実施計画書(オンライン実習の取組概要)」を申請し承認を得た。本稿ではこの当該科目の参加学生の反応とアンケート結果および教員の気づきを分析し、オンライン海外体験学習が実際に現場に赴く海外体験学習の代替となり得るのか、さらに、オンライン海外体験学習が開発教育の新しい潮流となる可能性があるのかを考察する。

著者の担当した海外体験学習を含む「国際協力フィールドワーク」科目では、「気付き」、「省察」、「抽象的概念化」の学習過程を経て深くわかったという成功体験により、履修学生が他の社会問題に対しても関心を高め、自律的に同様の学習過程を繰り返すという持続的な学習態度・習慣を身につけることができるようになることを目指している(加藤2020)。また、この学習過程において、国際協力という分野は途上国と日本との現象の違

いが「気付き」を促しやすく、抽象的概念化にも有利であることを指摘した（加藤2021）。

本稿の2. では2018年度の実際に訪問した際のインドでの現地学習と2020年度のオンラインでの現地学習の内容・方法とを比較する。3. でオンライン現地学習参加直後の参加学生に対するアンケート調査結果を中心に教員の気づきも含めて学習効果を評価し、さらに4. でこの実践からオンライン海外体験学習の課題と利点を分析する。5. では4. を受けてオンライン体験学習発展の可能性を推論し、最後に今後の本分野の研究発展への期待をまとめる。

なお、本稿は2021年6月12日の国際開発学会春季大会で発表した原稿に、その後の当該科目の学習状況についての分析を追加して取りまとめたものである。

2. 「国際協力フィールドワーク（インド）」のオンライン現地学習

(1) 「国際協力フィールドワーク（インド）」科目

「国際協力フィールドワーク（インド）」は桜美林大学リベラルアーツ学群国際協力専攻の4単位科目であり、かつサービスラーニング科目としても認定されている。国際協力専攻の専門科目であるので履修対象は2年次以降の学生であり、実際の履修学生は2、3年生が中心である。また、当該科目を含む「国際協力フィールドワーク」²は国際協力専攻の実習科目であり、国際協力専攻をメジャーとして卒業するための選択必修科目となっている。以上のことから、筆者としては国際協力、サービスラーニング、リベラルアーツの3点を念頭に科目を実践することとしている。また、筆者の担当した「国際協力フィールドワーク（インド）」及び「国際協力フィールドワーク（フィリピン）」は現地に赴く前の10回の講義・履修学生事前調査発表授業を中心とする事前学習、約2週間の現地学習、現地学習での気づきから課題を分析し発展研究論文³を執筆する4回の指導授業を含む事後学習の3段階で構成されている。事前学習初期の段階で、事前学習＝調べる、現地学習＝感じる、事後学習＝考える と単純化して履修学生に説明している。これは、現地学習で感じるまたは揺さぶられることが最大の学習契機であり、事前学習はこの感じるための基本的な知識を得る段階、事後学習は感じた課題について可能な限り「抽象的概念化」を目指し考える段階と位置付けているためである⁴。

(2) 現地学習（実際の訪問の場合）

2018年度の実際に現地に訪問した現地研修の日程は表1の通りである⁵。プログラムの日程及び内容については事前に担当教員がプログラムの実施主体であるインドのNGO⁶と調整し、現地ではNGOの代表や訪問団体がプログラムを実施する。担当教員は全日程同行し、リスクマネジメントを含むプログラム監理と履修学生の「気付き」を促すための日本語による振り返りなどを主催する。また、英語での説明の理解が十分ではない履修学生も

参加しているので、通訳の補助も行っている。なお、2018年度の参加学生は5名であった。

表1 2018年度国際協力フィールドワーク（インド）

2月	日程
1日（金）	成田発（フライト遅延）
2日（土）	バンガロール着 市内泊（到着1日遅れ）
3日（日）	主催 NGO ウェルカムセレモニー オリエンテーション 子どもの人権、インドにおける貧困や教育問題に関する講義 Lalbagh Gardens 訪問
4日（月）	ストリートチルドレン保護 NGO 訪問 子供との交流 振返り（日本語） ドキュメンタリー映画（インドのトイレ）鑑賞・質疑応答
5日（火）	宗教紛争のあったスラム訪問（スラム居住者インタビュー） 市内商店街散策 振返り（日本語）
6日（水）	ジェンダー問題に取り組む NGO 訪問、女性へのインタビュー 日本・インドフォーラム（文化交流、日本・インド学生によるプレゼンテーション）
7日（木）	郊外農村の主催 NGO 施設（小学校・幼稚園及び保護施設）へ移動（以後施設内ドミトリー泊） 前半プログラムの振返り（英語） 主催 NGO ウェルカムパーティー インド伝統文化体験（サリー/クルタ）
8日（金）	モーニングヨガ 村落開発シミュレーション カースト、文化、環境等の講義 農村調査 PRA オリエンテーション カンナダ語（現地語）レッスン 主催 NGO 施設の子どもたちとの交流
9日（土）	モーニングヨガ 農村調査 PRA 農村ホームステイ
10日（日）	農村ホームステイ 農村女性グループとの交流・討論 近辺の農村への宣伝活動支援、見学 主催 NGO 施設の子どもたちとの交流

11日(月)	モーニングヨガ 振返り(日本語) 学校建設ボランティア(レンガ積) 主催NGO施設の子どもたちとの交流
12日(火)	モーニングヨガ 学校建設ボランティア(レンガ積) 全体振返り(英語) キャンプファイヤー
13日(水)	パンガロール発
14日(木)	成田着

(3) オンライン現地学習

2020年度の科目を履修しオンライン現地学習に参加したのは6名であり、6名中5名がリベラルアーツ学群国際協力専攻の3年生であった。1名は他学群の2年生である。2020年度の現地学習の日程は表2の通りである。可能な限り現地訪問と同様の内容を目指した。このため、事前収録したビデオではなく⁷ Zoomによる双方向ライブでの実施を基本とした。一方で、レンガを積み学校建設ボランティアはオンラインではできないので、受入NGO代表と相談の上、NGOの経営する学校の小学生に対する教育ボランティアを主なサービスラーニングとした。さらに、ホームステイもできないので、農村家庭への訪問を残しつつ、さらに家庭環境がわかるように新たにインド料理教室の時間を設けた。インド料理教室では履修者6名の内、5名が実際に各自の自宅でインド料理を作った。インドと時差が3.5時間あり、Zoomでインドと接続していた時間は午後の2時から4.5時間で、その他に担当教員による日本語での振返りを毎日1時間程度Zoomにより実施した。参加学生は交流、プレゼンテーション、教育ボランティア、英語での振返り発表の準備、事前配布の講義資料の確認、参考動画の事前視聴等、日曜以外の2週間は、ほぼ丸一日インドの現地学習に集中していたと考えられる。

表2 2020年度 オンライン現地学習日程

2月	日程(時刻は日本時間)
1日(月)	13:30-14:30 主催NGO 歓迎会・オリエンテーション 14:30-16:30 主催NGO 代表講義; 貧困、子供の人権、教育 16:45-17:30 当日の振返り(日本語)
2日(火)	14:30-16:35 女性の人権、ジェンダー活動NGO 訪問・質疑応答 16:50-18:00 当日の振返り(日本語)
3日(水)	14:30-16:30 主催NGO 講義: 農村・カースト制度 16:45-17:30 当日の振返り(日本語)

4日(木)	14:30-15:30 宗教紛争のあったスラム訪問 (事前収録を含む) 15:30-16:40 スラムの人々からの説明・質疑応答 16:50-18:20 当日の振り返り (日本語)
5日(金)	14:30-16:20 現地カンナダ語研修 16:35-18:00 週の振り返り (日本語)
6日(土)	14:00-15:45 主催 NGO による週の振り返り (英語) 16:30-18:30 日本・インドフォーラム (文化交流、日本・インド学生によるプレゼンテーション)
7日(日)	休み
8日(月)	13:00-13:45 前週の振り返り (日本語) 14:30-16:30 農村訪問・女性たちとの対話・交流 16:45-18:00 当日の振り返り (日本語)
9日(火)	14:00-15:40 インド家庭でのインド料理教室 16:30-18:40 農村・貧困理解シミュレーション
10日(水)	インド動画事前視聴 13:30-14:15 前日の振り返り (日本語) 14:30-16:20 インド動画討論 (子供の人権、公衆衛生) 16:35-17:50 当日の振り返り (日本語)
11日(木)	13:30-15:30 学校教育ボランティア 15:45-16:30 当日の振り返り (日本語)
12日(金)	13:30-15:10 学校教育ボランティア 15:20-16:10 翌日英語振り返り準備討論 (日本語)
13日(土)	14:30-16:30 主催 NGO による全体振り返り 16:45-18:00 最終振り返り (日本語)

インドと Zoom 接続中はほとんど教員は通訳を行わず、各参加学生が以下の説明に基づき各自の PC で Google 翻訳にアクセスし、その補助により会話や講義の内容を把握するようにした。

Zoom の相手の音声を Google 翻訳する。

- ① Google 音声翻訳 は Google Chrome からのみ
- ② Google 翻訳を立ち上げる
- ③ 翻訳語の選択
- ④ スピーカーボタンを押す
- ⑤ 5000 字になったら一度×でクリアー

これは、一つには NGO 代表の英語は翻訳機能でほぼ日本語に翻訳されたからであり、

もうひとつは Zoom 接続の時間の節約のためでもある。Google 翻訳にかからない英語話者もあり、その場合は時間をおいて NGO 代表に概要をもう一度話してもらうという場面もあった。農村やスラムでは現地カンナダ語を NGO 代表により英語に翻訳してもらった。なお、参加学生からの質問・発言は英語で行った。

一方で、担当教員による日本語での振返りを毎日行うようにしていた。これにはいくつかの目的があった。翻訳機能による理解不足を補う通訳の補助、内容の理解の補助、参加学生の「気付き」の促し、参加学生間の協同学習相互作用の促進である。前者の2つは実際の訪問では活動と同時に進めていたものである。最初に英語のヒアリングでわからない部分を確認していたが、これに少なくとも15分程度は要した。実際に翻訳はほぼ理解可能なものであるが、翻訳された語彙の概念や背景が理解できない場合がほとんどで、英語の理解と内容の理解は実は不可分に近いものであった。

費用については、実際に訪問する場合は学生1名につき航空賃および宿泊費・食費を含めて約25万円を要していたが、オンラインでの費用は受入 NGO にとってもトライアルであったこともあり一人300ドルに設定された。オンラインの場合には JASSO (独立行政法人 日本学生支援機構) からの奨学金の対象とはならないが、関係者の理解により桜美林大学の短期海外留学の奨学金3万円の対象となった。

3. オンライン現地学習に対する参加学生の反応と学習評価

(1) オンライン現地学習直後の参加学生アンケート結果

オンライン現地研修の終了後、その日のうちにアンケート用紙をメールで配布したが、回答は参加者6名中4名であった。その結果は表3、表4の通りである。なお、通常は事後学習を含めた科目終了後に授業内容中心のアンケートを実施しており、オンライン授業に特化した質問を設定し現地学習直後に実施したのはこのアンケートが最初である。実際のアンケートは27の設問で構成されているが、表にまとめたものはオンライン授業に関係する部分にフォーカスして抜粋してある。

表3 オンライン現地学習直後のアンケート調査結果

質問	大変そう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない	具体的な数値等(記載者のみ)
評価					
(1) 現地オンライン学習を受けて総合的に満足した。	4				
(2) この現地オンライン学習の履修を友人・後輩などに勧めたい。	4				
(3) 当初考えていたオンラインでの現地学習よりも満足いくものであった。	4				
(4) やはり現地にきたかった。	4				
期間・時間					
(5) 現地プログラムの全体12日間の期間は適当であった。	3		1		(理想的な時間) 3週間
(6) 日々のオンライン学習時間(3時間~4.5時間)は適当であった。	3	1			(理想的な時間) 4時間、4-5時間
(7) 日本語による振り返り時間(0.75~1時間)は適当であった。	3	1			(理想的な時間) 1~1.5時間
(8) 日々の予習・復習(活動準備・振り返りシート記入等)時間は適当であった。	2	1			(実際の時間) 1~1.5時間、2時間
オンライン機能 (google翻訳)					
(9) オンライン現地学習のPCの操作は慣れた。	2	1			
(10) Google 翻訳機能は役立った。	3	1			(参考にした割合) 50%、70% (慣れるまでの日数) 2日間
英語学習効果					
(11) 現地学習を通じて英語での会話能力が向上した。	1	3			
(12) 現地学習を通じて英語での会話に自信がついた。	1	1	2		
協同学習					
(13) オンライン現地学習時間以外で他の履修学生と話す機会もあった。		2	1		(実際の回数) 1回、4~5回
費用	非常に安い	安い	適当	高い	
(14) プログラム費用は全額受入NGOに支払われその活動費用となりますが、この費用額(300\$相当)について、	1	1	2		(3万円の大学奨学金前提で支払い可能で妥当な金額) 5万円×2人、5~6万円

表4 オンライン現地学習直後のアンケート(自由記載)調査結果

オンラインでの現地学習について、
良かったと思う点
<input type="radio"/> 現地に行けずとも現地の人からのお話や暮らしがわかってよかった。 <input type="radio"/> 直接会えないからこそ、画面越しにでも伝わるように積極的に参加し、お互いに前向きに参加できるよう努力した。 <input type="radio"/> 翻訳機能を使えるため、事前に用意していない質問もすることができた。 <input type="radio"/> チャットからWEBに飛べて理解補助となった。 <input type="radio"/> 家での学習時間がしっかり取れた。
悪かったと思う点
<input type="radio"/> 現地に行けていたら、もっと直接触れ合えたと思うし、感じ方も違ったと思う。 <input type="radio"/> インドの雰囲気を肌で感じるができなかった。 <input type="radio"/> 時々電波が悪くなって聞き取りづらくなることなどが少し不便だった。 <input type="radio"/> 屋外や人数多数の場合、音声が聞き取りにくいことが多々あった。 <input type="radio"/> ほとんど休憩なしで三時間ほど画面を見ている際は頭痛がしてくることがあった。 <input type="radio"/> 他の参加学生と実際に会って学習をしたかった。周りとの会話がなかったので、学習という面であまり実感がなかった。

(2) アンケート結果分析と当該オンライン現地学習の評価

表3のアンケート結果の「評価」からも参加学生の満足度は非常に高いものであった。実際に訪問した場合もほぼ履修科目に対して大変満足という評価であるが、オンライン現地学習についても同様の結果となった。とくに、「当初考えていたオンラインでの現地学習よりも満足いくものであった」という設問に回答者全員が「大変そう思う」としており、担当教員としても同様の評価である。また、現地学習の最後に担当教員による全体の振り返りを行っているが、その際の参加学生の「気付き」や反応もその内容において例年のものと大きな隔たりはなかった。課題認識や課題解決を考えるモチベーションの維持などの観点から、オンライン現地学習を通じた体験が定着していくのかをさらに観察していく必要はあるが、現地学習終了直後の評価としてはオンライン現地学習においても実際の訪問に近い学習効果が期待できると考えられる。

次に、オンライン現地学習の期間・時間についてであるが、表3のアンケート結果の通り、参加学生にとって概ね妥当との評価であるものの、より長い期間、時間を希望する学生も存在した。一方で、表4のコメントの通りオンラインでの継続的な視聴については身体的苦痛を記載した参加学生もいた。当該学生の「普段あまりPCやスマホを見ないからかもしれない」との付記コメントや少なくとも1.5時間に5分から10分程度の休憩を入れていたことを考慮しても、少人数を対象にかなり集中しての双方向授業であるので身体的な負担への配慮も必要である。実際の訪問プログラムでは食事・就寝なども含め24時間が学習時間とも言えるが、オンラインの場合は効率性も勘案して内容を取捨選択せざるを得ないため、オンライン中の時間は現地に行く以上に集中力を学生に求めている部分がある。プログラムの進捗を見ながら1時間に5分、2時間で15分程度の休憩時間を意識的に取るように試みてもよいと考える。

日本語での振り返りは、英語と内容の理解の補足説明の後に、各参加学生の気付きや感想を述べ、相互に議論をしてもらうような例年と同様の方式を取ったが、やはり「気付き」を促すために、参加学生のコメントを端緒に教員がそれまでの参加学生の現地体験を補足説明する部分も多かった。たとえば、インドの農村では電気供給時間が限られており停電することも珍しくないが、実際の訪問では電気ポンプで屋根のタンクに汲み上げた水によって流すトイレが停電で半日以上流れなくなったことや、数日間冷蔵庫のない生活を送った後に近くの町で味わった清涼飲料水の美味しさなどを補足体験説明として紹介した。これらは、担当教員が何度か学生と現地に行ったから補えたものでもある。一方で、オンラインでも参加学生による「気付き」もあった。教育ボランティアにおいて教室に参加していた一人の女子生徒のアクセサリや服装が他の生徒と少し異なる点に一部の参加学生が気づき、NGO代表からその家庭の宗教感などの説明を受けた。

翻訳機能については、慣れるのに2日程度は要した。PC上で翻訳画面をどのように配置するか、どの程度翻訳機能のサポートを受けるかなどの自分なりの見当をつける必要があった。翻訳サポートへの依存度はアンケートによると50%から70%となっているが、

個人の英語レベルによるところが大きい。サポートを受けない、翻訳機能の英語を見る、わからない部分の日本語を見る、翻訳機能の日本語を一貫して追うなど、個人の語学レベルに合わせた対応が可能となっていた。実際の訪問の場合は、最も理解の難しいと思われる参加学生に合わせて逐語に近い形で通訳するなどの対応を取っていた。なお、「現地学習を通じて英語での会話に自信がついた。」では半数が「あまりそうは思わない」となっている。英語での振り返りなどの活動において参加学生の英語表現について例年と大きな差は見られなかったが、実際の訪問では正式な活動場面以外にも、さまざまな場面で個人的に交流の機会があり、とくに他の参加学生や教員のいない躊躇のない環境での子供達などとの英語での交流を通じて自信を得られやすいと推論する。

協同学習については、アンケート結果を見ても明らかな通り実際の訪問とオンラインとでは大きな差があった。「他の参加学生と実際に会って学習をしたかった。周りとの会話がなかったので、学習という面であまり実感がなかった。」との意見もある。実際の訪問では活動時間以外に、食事時間や就寝前のプライベート時間に参加者同士で意見交換などを行っていたが、オンライン現地学習では明らかにオンライン授業中以外の参加学生間の対話は限られていた。事前に参加者グループでLINEによる参加学生同士の意見交換可能な環境を設定していたがその使用頻度は少なかった。また、活動において互いに助け合うことを教員がリマインドする場面もあった。事前学習においてインド人学生との交流会のためのプレゼンテーションやアトラクションの準備などで参加学生による協同学習の機会も設定していたが、事前学習授業もオンラインで実施していたため、参加学生間の互いを知る機会が限定され親密度が例年ほどには高まらず、担当者を決めて分担し最後に調整するという方式が多くなっていた。

最後に、約2週間で300ドルの参加費用について、参加学生は適当または安いと考えており、3万円の奨学金を前提とした場合の支払可能で妥当な金額として多くが約5万円をあげている。奨学金がない場合については質問設定していないが、やはり現地に行けないことを考えるとオンラインの場合、自己負担が2～3万円程度が学生としての負担可能な感覚と考えられる。

(3) 事後学習と発展研究論文

本科目は2021年4月より、筆者の後任者⁸に引き継がれ、後任者のもとで事後学習、とくに発展研究論文の執筆が行われた。発展研究論文6件の傾向を見ると、テーマは女性・ジェンダー関係3件、教育関係2件、紛争1件であった。実際の訪問の際の内容の傾向とはほぼ同様であり、例えば、発展研究論文中のオンライン現地研修中の「気付き」に関する記載を確認した結果、その内容や頻度も例年と大きな差はなかった。なお、実際の訪問の場合の2年間で、タイトルに直接カーストを取り上げた発展研究論文は各年度平均1.5件であるのに対し、オンラインでは直接カーストを取り上げたものはなかった。社会や生活に根付くカーストを実感として意識する機会が少なかった可能性もあるが、各テーマの社

会背景として宗教やカーストにも多く言及されているので一概に課題認識の大きな差と捉えることはできない。

4. オンライン海外体験学習の課題と利点

(1) 海外体験の実感

3. (2)で、インド農村での電力供給事情に関わる体感実例を挙げたが、オンライン体験では視覚と聴覚での体験に限定され、スラム地区のゴミの臭いなども実体験としては感じることはできない。これが、表4のアンケート結果にある「インドの雰囲気を感じることができなかった。」である。この体感、すなわち経験の身体性について、強さや記憶の持続性の観点から参加学生の変容または学習にどのような影響を与えるのかはさらなる実証的な分析が必要である。

学習者の変容を促す経験を「直接経験」と「間接経験」との連関⁹と考えた場合、果たして相互作用機能の一部に制約を受けたオンライン体験が完全な「直接経験」であるのかという問題でもある。科学技術の発達に伴って「直接経験」と「間接経験」の構造変化が進んでいくのかもしれない。いずれにしろ身体性を伴ったインパクトの強い「直接経験」を重要な教材とする海外体験学習において、「テクノロジーあるいはメディアが招来する教材を教育的経験にする直接性の機能として、デューイは、「想像力」という概念を重視した。」(黒柳 2003)との指摘は示唆に富む。実際に教員の振り返りにおいて他者の「直接経験」を言語化した「間接経験」の形で伝えていたわけであるが、「数日ぶりに町の商店に行って最も買いたいと思ったものは何か？」などの質問を投げかける形式にすることで、可能な限り自らの「直接経験」の想像と結び付けた「気付き」とする工夫が有効と考える。

(2) 時間的制約と活動の双方向性

オンラインでの学習時間が限られることも課題の一つである。実際の訪問の場合は、濃淡はあるものの24時間が学習時間であり、何気ない日常生活や現地の人々との関わりが学習の「気付き」になる場合もある。また、日常生活を共にすることで信頼感が醸成され、相互交流がより深くなる。農村の女性達との対話・交流においてそれを実感する場面があった。参加学生からの一般的質問に対して農村の女性達が答えていたのであるが、筆者もNGO代表も参加学生からの一方的なコミュニケーションになっていることに気まずさを感じ、途中で女性達から参加学生への質問を促したが例年よりも内容の薄い対話となった。この活動直後の振り返りにおいて活動の双方向性の重要性を参加学生に指摘したものの、ほとんど初めて会った人と、どこまで聞いてよいのか、参加学生にもどう交流すべきか迷いがあった。例年は各家庭にホームステイを行い、そこで夕飯の支度の手伝いや、子供との遊びなどの一定の家庭でのサービスを行い、信頼関係を築いた後に対話を行っていたので、双方向の対話が成立した。一方で、オンラインにおいて主なサービスラーニングとしても

設定した教育ボランティアについては双方向性が確立され信頼関係の構築も一定程度確立された。

この双方向性については、経験が「能動的内容」と「受動的内容」をふくむこと、すなわち「試みる」と「受け取る」の二つの営みからなる、とのデューイの指摘（田中 2019）と深く関係する。学習を「経験の再構成」と考えれば¹⁰、双方向のコミュニケーションまたはインタラクションは海外体験学習において最も重要な要素であると言える。例えば小学校建設の建設作業において、親方である熟練労働者や年齢の比較的高い女性の単純労働者とともに働いたが、その場では仕事の段取りの指示などの関係のみではなく実際のレンガの手渡しなどの直接のサービス授受関係または能動・受動関係が発生する。その際に一緒に働く人の技術や人となりを実際に見て取り、さらに彼らの賃金や生活、社会を想像することになる。このように双方向のインタラクションは、相互のサービスにより深くなることが多い。オンライン海外体験学習において、4. (5)に言及する教育ボランティアの例のように、参加学生の現地の人々への働きかけ・サービスの機会を工夫して組み込むことが非常に重要である。時間と方法が限られているオンライン環境において、仕掛けられたプログラムとなるような活動や構成の工夫が望まれる。

(3) 協同学習

協同学習を「意図的な計画」、「共に活動すること」、「意味ある学習」の3つの特徴を有する「仲間と共有した学習目標を達成するために小グループで一緒に学ぶ。」こととすれば（E.F.Barkley 他 2005）¹¹、「国際協力フィールドワーク（インド）」のオンライン現地学習は多くの協同学習要素を有する。例えば、アンケートで多くの学生がよかったと評価する活動に農村シミュレーションがある。これはインド農村の異なる家族構成、資産、収入、カーストの家庭の立場になって3年間、他の家庭・NGO・政府との対話・交渉を行いつつ生活し、収支計算表を作成していくという質の高いロールプレイ学習である。この学習においては、例年とほとんど学習成果は変わらなかった。逆にオンラインの Google ドライブによる収支表の共有や Zoom のブレイクアウトセッションの活用により効率的だった面もある。バーチャルでもインドに集中して訪問している感覚からか、参加学生の参加モチベーションも例年と同様に高かった。

一方で、オンラインでの協同学習の課題は、参加学生の「気付き」を促す環境が学生間の会話の減少により弱めらるのではないかという懸念である。認知科学の研究も踏まえて「学生が何を学ぶかは、これまで考えられてきた以上に、学生がすでになにを学んでいるかに依存します。」（E.F.Barkley 他 2005）との指摘があるが、海外体験学習の参加学生の「気付き」は、同様の学習経験を有する他の協同学習者に促されるケースもかなり多い。このため、振り返りでは教員は可能な限り参加学生に問いを投げかけ、参加学生から感覚、背景、ロジックを含めた「気付き」を引き出し参加学生間で共有させることが重要である。しかしながら、今回のオンライン現地学習では一定期間寝食を共にすることで相互の信頼感を

醸成し、就寝時間前や休憩時間にも意見交換などを行うなどの質の高い協同学習環境にまでには至らなかったと考えられる。

(4) 通信の不安定性

オンライン現地学習では現地 NGO、教員、参加学生が PC を用い、Zoom により双方向通信を確保して実施した。参加学生は大学の講義を 2020 年度当初より Zoom にて聴講しているため操作上の問題はなかった。ただし、1 名はそれまでの講義をタブレットで聴講していたのを翻訳機能の使える PC に切り替えたために慣れるのに 1～2 日間を要した。インド NGO との通信回線が不安定となることも想定して、Skype のバックアップも用意していたが使用することはなかった。一方でスラムや農村訪問については現地でスマートフォンを用いたため全く理解できないほどではなかったが回線の不安定性は避けられなかった。なお、インド人学生との交流などの場面において近距離で Zoom を使う場合にハウリングが発生するなど日本での場合と同様の課題は見られた。途上国でのオンライン海外体験学習においては通信環境の安定性が前提となるが、多くの地域で通信状況は改善しており、新たな通信技術によりさらなる改善も期待される。

(5) 参加学生の活動の創意工夫

オンライン現地学習の実践の中の学校教育ボランティアにおいてオンラインでの環境制約が逆に参加学生の創意工夫を促すという発見があった。これは、NGO が経営する小学校の少人数教室において 3～4 年生を主な対象として参加学生のリードの下に国際交流に関係する学習やゲームを行う活動において見られた。事前の準備として参加学生には少なくとも各人 1 つは教材（企画）を用意するように課題を与え、時間調整や教室マネジメントも参加学生に任せていたのであるが、結局各人が考えた手持ちの教材を使って順番にリードすることとなった。実際の教材は、日本語での名前書き、借り物競争、絵を用いたしりとり、日本語の早口言葉、食べ物ビンゴ、口頭説明による絵描きであったが、日本とインドの文化・習慣などの共通点や相違点なども認識できるなど教育効果も高く、インドの生徒も楽しんで参加していた。現地 NGO 代表からもこのアイデアを他の教育ボランティア活動にも使わせてほしいとのリクエストがあったほどであった。参加学生にとってもインドの子供達のことを理解する機会となり、教室の小中学生にとっても日本や日本人の学生を理解する機会となっており、双方向の関係性も成立していた。例年も短時間ではあるが教室での交流を行っており、その時の一般的な絵描きや合唱などと異なり、明らかに準備した教材に創意工夫が見られ、厳しい環境が逆に新たな創造を産むことの証左とも言える。

(6) 翻訳機能の活用

3. (2)での具体的な実践説明の通り、PC の翻訳機能の活用は、参加学生の英語のレベルに合わせて支援が受けられ、語学の不得意な学生にも海外体験学習に門戸を開くもので

大きな利点である。また、実際に活用してみると文意を捉えて翻訳を行う AI の発達には目を見張るものがあり、今後も利便性はさらに高まり、遠くない将来に通常会話と遜色ないレベルにまで達すると予想する。英語のみならず各国言語や各国の発音の特徴を認識した英語などの翻訳サービスも開始されており活用のさらなる拡大が期待される。

(7) 費用 (利点)

オンライン海外体験学習の最大の利点は費用の低減である。約 2 週間で 300 ドルは相当に安価で、実際に行く場合の 1/8 程度である。表 5 は 2021 年 5 月時点でオンライン海外体験学習に類似した海外スタディプログラムの費用を一覧にまとめたものである。

表 5 日本のオンライン海外スタディプログラム費用一覧

主催者	主な目的	訪問国	受入団体	期間	合計 (時間)	費用 (万円)	単価(円/ 人時間)	最低 人数	備考	
大学	A	語学+ビジネス	カナダ	現地大学	3週間	45	3	667	30	
	A	語学+SDGs	タイ	現地大学	2週間	20	1.6	800		
	B	文化・社会理解	ベトナム	現地大学	2週間	40	3.5	875	10	
	C	語学+文化理解	ハワイ	現地大学	3週間	27.5	6.5	2,364		奨学金2万円
	C	語学+文化理解	韓国	現地大学	2週間	50	5	1,000	10	奨学金2万円
NPO	A	開発	マレーシア	当該NPO	1週間	15	2.5	1,667		
	B	フェアトレード	東チモール	当該NPO	2時間	2	0.1	500		定員100
	C	SDGs	フィリピン	当該NPO	1週間	9	1.43	1,589		
	D	SDGs	フィリピン	当該NPO	4日間	4	1.3	3,250	10	
旅行 会社	大手A	SDGs	インド	現地旅行社	1時間	1	0.28	2,800	3組	
	大手A	SDGs	フィリピン		1時間	1	0.35	3,500		
	大手A	平和	ルワンダ	現地邦人会社	3日	9	6/団体	1,333	5~10	団体対象
	中小B	社会・文化	カンボジア	現地NGO	4日	10	1.6	1,600	10	定員25
	中小B	共生	カンボジア	現地NGO	2時間	2	0.55	2,750	6	定員30
	大手C	SDGs	カンボジア	現地NGO	1~2時	1~2				学校対象

2020年5月5日筆者によるWEB調査と計算による。空欄は情報なし。

Covid-19 のパンデミックの影響で旅行会社などによるオンライン海外旅行や NGO による海外スタディツアーが行われているが、その市場は確立されておらず価格や内容のばらつきは大きい。将来的には参加人数、内容、方式などによりいくつかのグループに分かれた上でその市場が形成されていくと考えられ、市場動向を把握していくことが重要である。大学の授業としての 10 名程度の少人数、1 週間以上の期間、双方向性を基本とする場合、時間当たりの単価は最低でも 1,500 円程度以上となることが表からも読み取れる。実際に受入団体にとっても、準備やサービスに要する時間や労力は実際の訪問の際と大きな差はなく大幅な減額は考えにくい。この最低価格は、1 日 2~3 時間、2 週間で 3 万円~5 万円程度である。これは表 3 (14) のアンケート結果とも一致するが、最低価格であり参加

学生の自己負担の可能性と受入団体の採算を考えると大学等からの奨学金の支給が強く期待される。

(8) リスクの軽減

オンラインの場合には実際には渡航しないので、とくに途上国を対象とする場合にはリスクが大幅に軽減される。担当教員及び大学関係部局にとっても、実際に途上国を訪問する場合には、事前の安全管理にかかる説明、予防接種の推奨、海外旅行保険の説明、フライトキャンセルの場合の対応、現地での事故・発病の場合の対応など教育指導以上にリスクマネジメントが求められる。途上国への体験学習を担当したことのある教員であれば、実施において全くアクシデントがなかったことはないであろう。オンラインの場合には、受入団体の活動そのものを阻むような事態の発生¹²以外の多くのリスクは著しく低減される。一方で、海外体験学習の一つの要素でもある参加学生のリスクマネジメント能力向上については実地での学習機会はなくなり、途上国の生活がリスクと隣あわせであることの理解も体感として感じることはなくなってしまふ。少なくとも実際の訪問の場合と同様に安全管理学習を十分に事前学習において実施することが望まれる。

5. オンライン海外体験学習発展の可能性

(1) 開発教育の裾野の拡大

4. のオンライン海外体験学習の利点である語学力、費用、リスクの障壁が著しく低減されることにより、開発教育に参加する学生の裾野の拡大が期待される。海外体験学習を実施している高等教育機関は多いが、実際にそれらのプログラムに参加する学生は、国際協力や国際ボランティアに対して強い関心を有する学生である。筆者の担当した1-2年生を対象とする国際協力入門の講義授業では毎学期150名の履修者があり、その期末レポートなどを読むと「国際協力フィールドワーク」に関心のある学生は一定程度存在するが、実際に履修する学生は年間で10名~20名程度である。実際に参加する学生も強い動機によりアルバイトなどで資金を貯めて参加している。参加の障壁、とくに費用が低減されることで希望者に対して入門から次の段階の学習への門戸を広く開くこととなる¹³。

(2) 広範囲で自由な海外体験学習プログラムの開発

オンラインでの海外体験学習は物理的移動の制約から解放されるので、より自由に様々なプログラムの開発が可能となる。具体的には例えば貧困をテーマにして、東南アジア、南アジア、アフリカの各国を同じプログラムで訪問することも可能である。また、リスクから訪問が難しかった紛争と平和構築をテーマに紛争地域で活動するNGOなどを訪問することも可能となる。さらに同行する教員も比較的自由に参加可能なので、文化・歴史・社会に詳しい地域研究教員にスポットで参加してもらい、同じ国でもテーマによって当該

専門分野の教員に参加してもらうことも可能となる。

(3) 受入実施 NGO などの発展機会の拡大

これまでの実際の訪問では受入団体を検討する際には、緊急対応可能な高等教育機関や比較的規模の大きい実績のある団体が選ばれることが多かったと考えられるが、リスクマネジメントの低減により、プログラムの内容により規模の小さな NGO などでも海外体験学習の受入れが可能となる。実際の訪問の場合には、参加学生の宿泊する施設の有無や条件、発病の場合の病院への交通手段の確保なども受入 NGO に求める場合もある。また、旅行会社手配の場合には一般にその管理費用が求められる。オンラインの場合にはこれらの制約要因がないので、プログラム内容本位で直接 NGO に依頼し実施することが可能である。Covid-19 の感染拡大の影響で運営の厳しい NGO が多数存在するが、SNS 発信を積極的に展開し活動資金を拡大する NGO も存在しており、オンライン海外体験学習の受入も活動拡大の契機となり得る。

6. 終わりに

「国際協力フィールドワーク (インド)」のオンライン現地学習の実践から 4. でオンライン海外体験学習の課題と利点を分析し、5. でその発展の可能性を論じた。Covid-19 のパンデミック前よりオンライン教育などについての研究はあったが、教育分野において益々この分野の研究が進むことになる。筆者も当初オンライン講義に戸惑う中で、学生の積極的なチャットなどでの発言や質疑応答、資料配布・リアクションペーパー回収・評価の効率性向上などの多くの利点も実感した。一方で、5. (3) で規模に依存しない NGO の発展の可能性に言及したが、新たな IT 環境下の高等教育においてもそれぞれの授業の価値が問われることとなる。筆者としては、如何に履修学生の個別の関心や学習到達度に寄り添い学習をサポートできるかということがこれからの授業においてさらに求められると考える。教員の同行する海外体験学習については履修学生の自らの「気付き」を基に課題分析やその解決方法の検討など、まさに個人に寄り添うアプローチを行ってきており、この取り組みを継続し、さらにオンラインによってより多くの学生が参加し新しい学びを獲得していくことを期待したい。

オンライン海外体験学習の課題やその改善方法を考えることで、4. で指摘した経験の身体性、「直接経験」と「間接経験」、経験における双方向性など、改めて経験とは何かを考えさせられた。Covid-19 の制約環境下での教育実践が、筆者にとって本質的な命題を考える契機になったのは、参加学生が同様の制限環境下で様々なボランティアの工夫を考えたのと同様の事象かもしれない。オンライン海外体験学習について、それを実践する各教員や認知科学などの各専門分野からの分析・研究が展開されることを期待する。

最後に、本稿執筆にあたり、「国際協力フィールドワーク (インド)」の現地学習プログ

ラムを運営・実施した VEDIKE 代表 Mr. Anugraha John 及び、当該授業の筆者の後任として事後学習を担当し情報提供いただいた桜美林大学熊谷晃子特任教授に感謝申し上げます。

参考文献

- 市村尚久・早川操・松浦良充・広石英記編、2003、『経験の意味世界をひらく—教育にとって経験とは何か—』、東信堂。
- 加藤俊伸、2020、「海外サービスラーニングにおける学習成果発現の過程と教員の関与—フィリピン、インドでの国際協力フィールドワークの実践から」、『桜美林大学サービスラーニングの実践と研究』第1号、34-41頁。
- 加藤俊伸、2021、「国際協力フィールドワークにおける抽象的概念化を促す教育実践」、『桜美林大学サービスラーニングの実践と研究』第2号、42-47頁
- 黒柳修一、2003、「経験とテクノロジーに関する一考察—デューイ教育論の視点から」、『経験の意味世界をひらく—教育にとって経験とは何か—』、東信堂、147-166頁。
- 子島進・藤原孝章編、2017、「大学における海外体験学習」、『大学における海外体験学習への挑戦』、ナカニシヤ出版、1-19頁。
- 田中智志編著、2019、『教育哲学のデューイ—連関する二つの経験』、東信堂、3-29頁、326-342頁。
- 溝上慎一、2014、『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』、東信堂。
- 矢野智司、2003、『「教育」と「体験」の教育人間学的考察—純粹贈与としてのボランティア活動—』、『経験の意味世界をひらく—教育にとって経験とは何か—』、東信堂、33-54頁。
- E.F.Barkly,K.P.Cross,& C.H.Major, 2005, "Collaborative Learning Techniques : A Handbook for College Faculty", John Wiley & Sons, Inc. (安永悟監訳)、2009、『協同学習の技法 大学教育の手引き』、ナカニシヤ出版、9-20頁、110頁
- J.Dewey, 1916, "Democracy and Education", (河村望訳)、2000、『「デューイ = ミード著作集 9 民主主義と教育』、人間の科学社、188-205頁

注

- 2020年4月の段階では、その後の感染拡大が予想できなかったのでフィリピンを留保し、2021年2月にフィリピンかインドのどちらか状況が改善された国を訪問しようとしたため一旦延期とした。
- 桜美林大学「国際協力フィールドワーク」は春学期に開講される「国際協力フィールドワーク（フィリピン）」と秋学期に開講される「国際協力フィールドワーク（インド）」及び「国際協力フィールドワーク（日本）」の3科目があり、筆者はこの内の（インド）と（フィリピン）を担当。
- 「発展研究論文」とはゼミ論文に相当するもので、それを発展させて卒業論文とする場合もある。
- 「国際協力フィールドワーク」科目の詳細、教員の関与、学習効果については（加藤2020）及び（加藤2021）参照。
- 2019年度は、同行教員が筆者1名となり、体調を崩した学生の対応や教員本人も体調を崩すなどイレギュラーな対応が多かったので2018年度を比較対象とした。
- 「国際協力フィールドワーク（インド）」の現地学習の現地プログラムは、インドのNGOであるVEDIKE - Vedike Global School（代表：Anugraha John）により運営・実施されている。
- スラム及び農村訪問については現地協力者またはNGOスタッフのスマートフォンを用いて対応したが、通信状態の悪いことを想定し、NGOにより一部事前収録を一部試みた。しかしながら、コミュニティにおけるCovid-19の影響に配慮し、限られたものとなった。このため、それ以前の動画や写真を活用する部分もあった。

- 8 2021年4月より熊谷見子特任教授に引き継がれ事後学習が実施された。
- 9 田中は、デューイの『経験と自然』の中で展開された概念として、一次経験（直接経験）は、主客が分かたれる以前の、人が世界と参与的につながっているという経験、言語として象られるものとしての経験であり、二次経験（間接経験）は世界を離散的に対象化するという経験、言語によって象られたものとしての経験としている。そして、二つの経験の連関の重要性を指摘している。（田中2019）本稿ではこの解釈に従い、さらに「直接経験」には「受動的 content」と「能動的 content」が含まれ、「間接経験」と「参与的につながっている」と解釈している。
- 10 田中は、試みる／受け取るという呼応の関係の中で享受の自然観が象られ深まることがデューイのいう「経験の再構成」の本態で、教育は継続的な経験の再構成として把握されるべき（田中2019）と解釈している。
- 11 E. F. Barkley 他は「協調学習は学生と教師が知識の創造に向けて共に学びあうときに生じる。・・・成長するという前提が中心にある。（Matthews, 1996, p101）」という「協調学習」と「協同学習」の相違を指摘し、高等教育においては「協調学習」の名称活用する傾向にあるとした上で、あえて「協同学習」の概念も含めた「協同学習技法」を説明している（E. F. Barkley 他2005）。筆者も本稿では「協調学習」の概念も含め「協同学習」としている。
- 12 当該オンライン現地学習においても、スラム及び農村訪問において Covid-19 の影響により実際に内容が制限された部分もあり、また、Covid-19 の影響に限らず現場での緊急事態宣言発出や現場の状況によってはプログラムの実施が不可能となる可能性もある。
- 13 筆者としては、国際協力の専攻者を増やすという趣旨ではなく、学生の学ぶ姿勢に好影響を与える開発教育学習の機会の拡大を企図している。